彼女を殺した人を知っている

nab42

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
彼女を殺した人を知っている

【Ｎコード】
Ｎ８６０７Ｑ

【作者名】
ｎａｂ４２

【あらすじ】
彼女は誰が殺したのか、彼女はなぜ殺されたのか。
吹雪の夜にパンダはやってくる。
殺し屋パンダシリーズ２作目
『彼女を殺した人を知っている』

プロローグ

【プロローグ】

私は真田(さなだ)くんの運転する車で、ペンションへと向かっていた。そこは何度か利用したことのあるペンションで、山奥にあった。近くのスキー場へ行くには車で四十分以上はかかるくらいだった。でも、私はそこが好きだった。夏は涼しく、緑を感じるには最適の場所で、冬は空から降る雪を見ながら、静かに心を落ち着かせることができた。もちろん、スキー場へと行ってスキーを楽しむこともできた。それに、有名レストランでシェフをしていたオーナーが作るフレンチは美味しかった。そしてなにより一泊の料金が安かった。スキー場の近くにあるホテルに泊まるよりも、断然安かった。

今回私が真田くんを誘ったのには、わけがある。私にはそろそろ彼に言わなければならないことがある。今、私たちは恋人という関係ではないけれども、そろそろ一歩踏み出さなければならないんじゃないだろうか。いや、そんな曖昧なことではダメだ。私は彼に告白をする。そうじゃなきゃ、誘った意味がない。

私はハンドルを握っている真田くんを見た。彼の顔は昔から少しも変わらなかった。真っ直ぐな眉毛と、笑うと出来る笑窪が私は気にいっていた。

彼を旅行に誘うのは勇気が必要だったが、彼は笑って「いいね」と言ってくれた。彼は有給までとってくれた。私は彼と三日間一緒にいられる。なんて幸せなんだろう。

「それにしても、すごい山奥だな。道路は一本道だし。雪も結構積もっているし。車が滑らなきゃいいけど」と真田くんは言った。

「うん。そうだね。でも素敵なペンションなの」

「そうだね。香代(かよ)が写真に撮ったフレンチも美味しそうだったし、値段も凄く安いし」と真田くんは笑窪を作って言った。素敵だ。

「あと十分ぐらい走れば着くよ」
「そうか」と彼は言った。「そういえば明日は晴れるのかな？　スキー日和だといいけど」
「どうだろう。明日は晴れるって天気予報はいってたけど……」。今夜は吹雪だといっていたことを私は言わなかった。
「まぁ、三日もあるんだしな。その時はその時でゆっくり過ごそうか」
「うん」と私は言った。
私たちの乗った車はどんどん山奥に入り、ペンションに近づいて行った。

事件現場

【事件現場】

二月三日、午前一時に携帯電話が鳴った。俺は自宅でぐっすりと寝ていたが、リリリンという軽快で人をドキリとさせる音で起こされた。電話は部下の佐々木からだった。全く、こんな夜中に……。嫌な予感しかしない。

「どうした？」

「藤堂（とうどう）さん。事件だそうです」と部下の佐々木（ささき）が言った。

「こんな吹雪の夜にか？」

「ええ、殺人事件です」

「現場は？」

「『ペンション矢麻野（やまのい）依』です」

「どこだ、そこは。この吹雪で行けるのか？」

「山奥にあるペンションです。この吹雪だから朝にならないと無理でしょうね」と佐々木が言った。佐々木も眠そうだった。

「犯人は？」

「まだ見つかっていないようです」

「今から署に向かうよ。そこで詳しく教えてくれ」

「はい。分かりました。気をつけてくださいね」と佐々木は言った。彼は外の天気のことを気にしているのだ。

「知っているよ」と言って俺は電話を切った。

朝になって、俺たちはようやく事件が起こったというペンションへ向かった。署から四十分も離れた山奥だった。天気は快晴で、山の方の吹雪もおさまっているようだった。

「本当に僕たちの管轄なんでしょうか？」と佐々木は安全運転を心掛けているのか、ゆっくりとアクセルを踏みながら言った。

「そんなことより、犯人は誰なんだろうな」
「分かりませんよ。まだ現場にも行っていないし、話も聞いていないんですから」
「二月三日の午前零時五十分に磯台香代(いそだいかよ)が、自身が泊まっている部屋で死んでいるのを友人が発見」と言いながら俺はタバコに火をつけた。
「そうです」
「頭を何かで殴られた跡があった」。タバコをもう一口。
「そうです」
「部屋の窓は開けられていた」
「そうです」
「ちっとも分からん。やっぱり現場に行くしかないんだな」
「もちろん、そうです」
「俺がもうちっと頭が良かったら安楽椅子に座りながら解決できたのかもしれんな」
「名探偵でも無理ですよ。これだけの証拠じゃ」
「その通りだな」と俺は言って、口を閉じた。

ペンションは予想より大きい木造の建物だった。大きな三角屋根をもった二階建てで、中にはいくつも部屋がありそうだった。だが、それより俺が驚いたのは隣にあった駐車場だった。日本には不似合いなアメリカ車を、二十台はとめることができそうな広い駐車場だった。そこには十台ほど車がとめてあった。その中の二台はパトカーで、もう一つは署の車だった。他の車の屋根にはまだ雪がこんもりと積もっていた。
玄関に行くと既に制服を着た警官が立っていた。彼は右腕の二の腕を水平にすると、指先まで伸ばして帽子につけた。綺麗な敬礼だ。俺は左手を上げて彼に合図した。
玄関から中に入ると、すぐ目の前にこぢんまりとしたフロントが現れた。フロントには一人くらいしか入れそうにない。フロントの

左手には一度右に折れまがった階段があり、玄関から入って、右手と左手には同じ大きさの両開きのドアがあった。ペンションの中は山奥に似合わず、どこかざわついていた。殺人事件が起きたのだから当たり前のことだろうが。

「藤堂」と、上の方から声がした。階段の手すりから上半身を出している同僚の中島（なかしま）だった。

「現場に入ってくれ」と彼は言った。

俺は靴を靴箱に入れ、現場となった部屋へと向かった。

階段を四段上ると、右に曲がり、そこからまた階段を登り、左を向くと一本の長い廊下についた。後ろを振り返ると、そこからは玄関が見えた。中島が立っていた場所だ。

長い廊下の両側には五つずつドアがあった。磯台香代の遺体がある部屋は、左手の手前から二つ目の部屋。部屋番号は二〇二だった。

部屋に入ると、風が正面から吹いてきた。部屋に入って正面には横に少し長い長方形の窓が見えた。大きさは俺の両腕を伸ばしたくらいだろうか。風のせいで窓の両脇にある白いカーテンが揺れている。部屋では鑑識が指紋などの情報を集めるためにせっせと動いていた。彼らはハケで壁や物の表面をなぞっていた。何か見つけただろうか。

遺体はまだそこにあった。正面にある窓、左の壁につけてあるベッド、右の脇に寄せてあるソファとテーブル、背もたれ付きの椅子、それらのちょうど中間に遺体はあった。鼠色の毛布が被せてある。

「見てもいいですか？」と佐々木は言って、白い手袋をした手を合わせた。そして毛布をめくった。

磯台香代は側頭部を何かで殴られていた。その部分は陥没しており、渇いた血でどす黒くなっていた。顔面の左側も同じく血で染まっていた。床のカーペットはその色で染まっている。

「報告された通りだな。即死だろうか」

「いや、失血死みたいだな。詳しいことは解剖されてからだが」と中島は言った。

「それにしても窓が開けられていたわりには、雪も、水たまりもな

いな」
「ああ、それなんだが、真田という被害者の友人が閉めたらしい」
「分からなくもないですね。現場はそのままにしておいてもらいたいですけど」と佐々木は言って、手帳にメモをとった。
「窓を見せて貰おうか」と俺は言って、窓に近づいた。
俺が窓に近づくと鑑識官の一人が寄ってきた。
「窓には被害者の指紋は残されていませんでした。真田という男の指紋だけでした」
「指紋をふき取った跡は？」
「ありません」
犯人は指紋をつけないように開けたのか、もしくは開けたのも閉めたのも真田というやつだけなのか……。
「あと、窓の縁の上の部分、ここですね」と鑑識官は言って窓縁の上の部分を指差した。窓を閉めたら見えなくなってしまう部分だ。
「ここに被害者のものと思われる血がついています。それと窓の上の壁にもついていますね。右のカーテンにも」
その他にも、遺体から窓に向かって、床のカーキ色のカーペットにも血が点々とついていた。
「殴った時についたのでしょうか？」と佐々木が言った。
「さぁな。だが、もしそうだとしたら窓を開けたまま殺されたことになるな」
「そうですね。吹雪なのにおかしいですね」
「つまり違う時についたのだろうな。たぶんだがな」と中島は言った。
俺は窓から身を乗り出して外を見た。冷たい空気がさらに顔を刺した。
「昨日はもっと雪が積もっていたのかな。ここから飛び降りても大丈夫なくらいに」
「そうだろう。この窓から飛び降りて逃げた可能性もある」
「上の屋根には登れないだろうか？」

「不可能ではないだろうが、その場合、ロープか何かを使わなければならないな。屋根から窓まで届くくらいの」
「屋根までどれくらいあるだろう？」
「どうだろうな」と中島も窓から身を乗り出して上を見た。「三メートルくらいか？」
「何かあるかもしれない。雪を下ろす時に調べてもらおう」と俺は言った。だが、吹雪の日に屋根へと登るのはないかもしれないなと思った。
「まぁ、屋根を使ったのはないでしょうね。そんなややこしいことするんなら、死体の発見を促す電話を、真田の部屋にしませんよね」と佐々木が言った。
磯台香代が殺された時に一緒にいた人物、犯人もしくは犯人にかかわりのある人物が真田の部屋に内線電話をかけていた。それを受けた真田が二〇二に来て、死体を発見したというわけだ。
「そうだな」と俺は言った。
俺は横の部屋には行けるだろうかと、さらに身を乗り出して左右を確認してみた。こちらも、ロープか何かがないと行けないようだった。窓の外側には何かを引っかける場所もなく、移動は難しく思えた。
窓からは森が見えていた。窓から二メートルのところに幹の太い木があった。
俺は窓を背に向け、もう一度部屋をぐるりと見回してみた。ベッドには布団と枕があった。そこにあっただろう毛布はたぶん、遺体にかけられている鼠色のものだろう。コーヒー豆のような色をしたベッドサイドテーブルにはペンとメモ帳、電話機、そして簡素なベッドライトがあった。ベッドライトは点けられていた。
「部屋のあらゆる電気は点けられていたらしい。部屋の電気も、トイレも浴室も、ここのベッドライトも」と中島は言った。
俺はメモ帳を調べたが、何も書かれていなかった。
部屋にある小さなテーブルには白いカップと、受け皿、そして白

い錠剤が置いてあった。何かの薬のようだったが、飲まれた形跡はなかった。受け皿の上にはティースプーンと紅茶のパックがあった。カップには飲みかけの紅茶らしきものがあった。
「これらは、この部屋にあったものか？」と俺は聞いた。
「その錠剤の他は、そうだ」と中島は言った。
「入口から入って、すぐ右側にある棚にありました。電気ポットとか、インスタントコーヒーもありましたね。棚の下には冷蔵庫も」と佐々木が付け加えた。
俺はそこを見た。確かにそこには、佐々木が言ってくれたものが揃っていた。
「そして、その隣にあるドアがトイレのドアで、その反対側、部屋に入って左側にあるドアが浴室のドアです」
「使われた形跡は？」
「両方ともあります」と鑑識官が言った。「浴室には頭髪も落ちていました。三人分です。一つは被害者のものと思われます。あと二つは、まだ分かりませんが一つは長い黒髪、もう一つは長い金髪です」
「部屋に落ちていた頭髪は？」と俺は聞いた。
「これからきちんと調べますが、五種類以上はあると思われます」
「五種類以上か……」
「ここのオーナーからの報告によると、ここに泊まっていた客、そして従業員のほとんどがこの部屋に入っているみたいですね。もしくは、前に泊まっていた客のものとも考えられます」
「ふん」と俺は頷いた。
「トイレからは何か見つかったのかな？」と俺は聞いた。
鑑識官は「何も」と言って、首を横に振った。
「入口のドアノブに指紋は？」
「四人分の指紋が」と鑑識官が答えた。
「なるほどね」
「何か分かったんですか？」と佐々木は言った。

「何もまだ分からん。とりあえず、昨日ここにいた人物に話を聞かないとな」
　するといつの間にか部屋から出ていた中島が、ドアから入ってきた。
「二〇九号室を使わせてもらえる。そこで昨日、ここにいた人の話を聞いてくれ。俺はとりあえず客への聞き込みは終わった。今から従業員の話を下で聞いてくる。藤堂は最初に客の話を聞いてくれ。客にはそれぞれの部屋に待機してもらっている。これがリストだ」と彼は俺に一枚の手書きの紙を渡すと、すぐに去って行った。階段を軽快に降りる音が聞こえてきた。
　俺は中島の書いたリストを佐々木に渡した。
「誰から呼びましょうか？」と佐々木が言った。
「まずは第一発見者から話を聞こうか」と俺は言い、二〇九号室へと向かった。

真田一季の証言

【真田一季の証言】

「はい。さなだいっき、で合っています」と真田は言った。黒い髪を短く刈っていた。眉毛は真っ直ぐに伸び、顔のパーツは整っていて、いわゆるイケメンと言ってもおかしくはなかった。だが、顎の弛んだ肉や、膨れたような体のせいで、台無しになっていた。

「まず当時の様子をできるだけ詳しく教えてください」

「分かりました。あ、でも、さっきの刑事さんにも同じことを言ったのですが……」

「構いません。何回もお話頂くことで、違ったことが思い出されるかもしれませんから、何回も聞いているんです。もちろん、お辛いとは思いますが、早く事件を解決するためにもお願いします」

「分かりました」と彼は言って、大きく息を吸った。

「午前零時五十分頃でしょうか。時計を見たわけじゃないので、分かりませんが、たぶんそれくらいです。ベッドでうとうととしていると、部屋に電話がかかってきたんです。誰だろうと思って、受話器をとりました。『もしもし』と言ったんですが、返事は聞こえませんでした。もう一度『もしもし』と言ったのですが、何も。で、ふと思ったんです。香代じゃないかなと。だから『香代？』と言ったんです。何も返ってきませんでしたけど。で、耳をすますと風の音が聞こえたんです。どうしたんだろう、と思って僕は受話器を置きました。そして隣にある香代の部屋に行ったんです。ドアを開けると、窓が開いていました。そして香代が倒れているのが見えたので、急いで近づきました。

「その時、部屋の電気は点いていましたか？」

「ええ、点いていました」

「ベッドランプや浴室の電気が点いていたかどうか覚えていません

か？」
「いや、そこまでは覚えていません」
「そうですか。すみません、続けてください」
「はい。ええと、そして、香代のそばに行ったんです。頭から血を流してました。僕は彼女を抱き抱えて大声で名前を呼びました。反応がないので、もう一回か、まぁ、何回呼んだかは覚えていません」。真田の声は涙声になっていた。
「すいません」と言って彼は服の袖で目を拭いた。
「そしたら、ドアから女の人が入ってきたんです。ええと、花城さんだったかな。ここに泊まっている人です。その人が入ってきたんです。『どうしたんですか？』って言われました」
「花城さんがドアから入ってくるところを直接見ましたか？」
「いや、それは見ていませんけど、ドアの近くに立っていましたし」
「なるほど。続けてください」
「それから彼女は近づいてきました。そして小さく叫びました。まぁ、僕もなんとなく分かっていました。すでに香代は死んでいました」と真田は言うと、今度は隠すことなく涙を流した。
しばらく彼は泣いていた。佐々木を見ると、メモをとりながら同情の眼で彼を見ていた。
すると落ち着いてきたのか、真田は「すいません」と声を出して謝った。
「そのあとのことを聞かせてもらいますか？」
「はい。そのあと、男の人が部屋に入ってきました。今度はきちんと入ってくるところを見ました。名前は分かりませんが、泊まっていた客です。昨日、ダイニングで見ました。彼も『どうしたんだ？』と言いました。まぁ、そこからはもう、分かりません。僕は茫然として、香代を抱いていました。何人も部屋に来ました。で、たぶん、オーナーさんが警察に電話をしたと思います。ああ、でもそれも分からないな……ずっと部屋にいたし。で、皆が部屋から出て行ったあとに、僕はオーナーさんに連れられて自分の部屋、二〇三に戻り

ました。着替えるようにと言われました。服には血が付いていましたし。そのあと、部屋で着替えて、もう一度香代の部屋に戻りました。香代には毛布がかけられていました。窓が開いていたので、僕は窓を閉めました。そのあと、オーナーさんが部屋に来て、リビングに来るように言われました。他のお客さんたちや、従業員の方もいました。オーナーさんが、『警察が来るまでここにいるように』と。ぼくらはそこに朝までいました」

「なるほど。では、磯台さんとの関係を教えてください」

「香代とのですか？」と真田は言った。「香代とは高校時代からの友達です」

「知り合ったのは高校時代の時ですか？」と佐々木は聞いた。

「ええ。あの、詳しく言うと元カノの友達です」

「今はどういった関係ですか？」

「友人の一人です。元……元カノが亡くなってから、よく僕を励ましてくれていました」と言ってまた彼は涙声になった。

「お付き合いなどはされていなかったんですね？」とメモを取りながら佐々木が聞いた。

「ええ、していませんでした」

「ところで、その元彼女はなぜ亡くなられたんでしょう？」

彼は涙目で俺の顔を見た。

「それが何か事件に関係あるのですか？」

「いえ、関係はないかもしれませんが、意外なところから何か分かる時があるのです。よろしければ」と俺は言った。

「彼女は、美沙希（みさき）と言ったんですが……。彼女は自殺をしたんです」

「自殺ですか？」

「ええ、自殺です。一昨年の、十月九日です。車の中で自殺をしました。一酸化炭素中毒だったみたいです。車の中には練炭があったそうです」

「それはどこで？」

「山の中です。彼女の家から車で一時間のところです」

「原因はなんだったのでしょう？」
「原因ですか？」と彼は言って、うつむいた。
「僕はきっと死神なんです」と彼は言った。
俺は佐々木を見た。佐々木も俺を見ていた。佐々木はわけが分からないといった顔をしていた。俺もそんな顔をしているだろう。
「なぜです？」と俺は聞いた。
「僕の近くにいる女性は死んでしまうんです」
「だから、なぜ？」
「前回も、今回も、僕のそばにいたじゃないですか」と真田は何故分からないんだというように言った。
「自殺の現場にいたのですか？」
「いいえ、そういう意味じゃないです。親しくしていた女性がってことです」
「遺書か何かは残されていたのですか？」
「もういいでしょう？　彼女のことは」と彼は言った。
「お願いします。真田さん。辛いことは私たちも分かっています」と佐々木は言った。
真田はしばらく黙ったあと、「僕の浮気が原因です」と言った。
「浮気」と言って佐々木はメモを取った。
「遺書にそう書かれていたのですか？」と俺は聞いた。
「いや、遺書はなかったんです。ただ」
「ただ？」
「気付いていたと思います。彼女が僕の携帯電話を見ているのを見たことがあります」
「そうですか。浮気相手というのは？」
真田は、そこまで聞くのか、という驚きの顔をしていたが「会社の得意先に勤めている人です」と言った。
「その人とは今は？」
「何もありません。浮気自体短いものでした。二週間くらいでしょうか。彼女が携帯電話を見ているのに気がついて、やめました」

「それについて何か言われました？」
「言われませんでした。優しかったので、許してくれたものだと思いました。僕はそのあと、彼女に尽くすことを決めました。もう二度と浮気なんてやらないと固く決めました。でも、美沙希は死にました。やっぱり苦しんでいたんでしょう。僕は言葉に出して謝るべきだったんです」。そう言って、彼は顔を隠して泣き始めた。今度はすぐには泣きやまないような、号泣だった。
　その真田を佐々木は抱えるように自室に戻した。しばらく彼からは何も聞けないだろう。

花城柚希の証言

【花城柚希の証言】

「はなしろゆずき、さんですね」と俺は彼女の運転免許証を見て言った。

「はい」と俺の前に座っている女性は言った。長い黒髪を彼女は持っていた。運転免許証によると、年齢は二十二歳だった。身長は百六十センチくらいだろうか。顔は少女のような幼い顔をしていたが、美少女と言っていい端正な顔立ちをしていた。唇には薄いピンクの口紅をしていて、化粧は濃くなかった。自分の顔の良さを知っているな、と俺は思った。

「何時に、このペンションに到着しました？」

「えーと、午後二時くらいでしょうか」

「それは昨日の？」

「ええ、そうです」

「それからどうされました？」

「リビングでテレビを見たり、ダイニングでケーキを頂いたり、部屋でくつろいだりしていました。外はまだ吹雪いていませんでしたけど、天気はよくなかったので外には出ませんでした」

「今回はご旅行か何かで？」

「ええ、そうです。気分転換に。一泊だけの予定でしたけど」

「お仕事は何をされているんですか？」

「今は何も」と彼女は言って、首元にあるハートのペンダントをいじった。

「前は何か？」

「前は探偵事務所で働いていました」

「探偵ですか」と佐々木は言った。

「ええ、でもすぐやめました」

「それはなぜ？」
「働く時間帯がバラバラでしたし、体調を崩しかけたのでやめました」
「そうですか。まぁ、分かります。我々の仕事もそんなものです」
と佐々木が言った。今回は佐々木に任せてみようか。
俺は顎で佐々木に続けるように言った。
「えーと、磯台さんを最初に見たのはいつでしょうか？」
「たしか六時だと思います。ダイニングで、夕食を食べる時に」
「その時は一人でしたか？」
「私がですか？」と彼女は聞いた。
「いや、磯台さんです」
「いえ、磯台さんは男の人と一緒でした。真田さんと言ったでしょうか、大柄の人です」
「どういった感じでした？」
「どういったとは？」
「親しい間柄に見えましたか？」と俺は言った。
「ああ、はい。仲は良さそうでした。二人は夕食を食べていました」
「何か変わった様子はありましたか？」と佐々木は言った。
「変わった様子ですか……。あの、磯台さんが少し変わっていたというか」
俺は身を乗り出した。
「まぁ、なんでしょう。私がそう感じただけかもしれませんが、皆さんのことをじろじろ見ていた気がします」
「じろじろと？」と俺は聞き返した。
「ええ」
「どんなふうにですか？」と佐々木は聞いた。
「うーん。何かを疑うようにと言ったらいいんでしょうか……。すみません。よく分かりません。ただ、皆さんのことを見ていたのは間違いありません」
「その時、ダイニングには誰がいました？」

「えーと」と花城は首を傾げた。耳たぶにはハートのピアスをしていた。
「私と、磯台さん、真田さん、あと男の人がいました。それと、オーナーの奥さんと、従業員の男の方が料理を運んできました。ああ、あとオーナーさんも少し挨拶に来られました。料理が口に合ったかどうか聞かれました」
「その人たちのことも磯台さんは見ていたのですね？」
「ええ、そうです」
「そうですか。ちなみに、磯台さんには初めてお会いしました？」
「もちろん、そうですよ」と花城は笑った。笑顔も美少女のそれだった。
「最後に磯台さんを見たのはいつでしょうか？」
「七時くらいですかね。ダイニングを真田さんと一緒に出て行ったのが最後です」
「何か変わったところは？」
「別に、とくには。ドアを閉める時に、部屋を見まわしたくらいでしょうか」
「そうですか。では、次に零時五十分頃の話をしてください」
「できるだけ詳しく」と俺は付け加えた。
「はい。私はベッドに横になって、本を読んでいました。文庫本です」
「それは何の？」と佐々木は聞いた。
「ただの小説です。『三波葉　太』って人の小説です」
あまり聞かない名前だなと俺は思った。まぁ、小説なんてここ数年読んでいないから当たり前か。
「昨日は風の音がひどくて、あまり寝られなかったので起きてたんです。そしたら、大きな声で誰かが叫ぶ声がしたので、何だろうと思って、部屋を出ました。部屋を出ると前の扉が開いていて、そこからまた大きな声が聞こえたんで、恐る恐る入ったんです。そうしたら、女の人を男の人が抱きかかえているのが見えました」

花城は思い出すように、小さな顎に手をおいて目線を下にして話していた。
「そして、『どうしたんですか？』と声をかけてから、近づきました。近づいてみると磯台さんが……血がついているのが見えて。驚きました」
「ドアは閉めました？」と俺は聞いた。
「ドアですか？　閉めていません。最初から開いていたので、開けっぱなしになっていたと思います」
「なるほど。それからどうしました？」
「それから、男の人が入ってきました。あの、ダイニングで一緒になった人です。短髪の、左耳にリングのピアスをしている人です」
「そのあとは？」
「それから、奥さんがやってきて、従業員の方がやってきて、最後にオーナーさんがやってきました。そのあと、オーナーさんが警察に電話をしに一階に降りました。あとは、オーナーさんが警察に言われたのか、私たちにリビングに行くようにと。私たちがリビングに降りると、オーナーさんはまた二階に行ったようでした。皆、何が起こったのか分からないようでした。私も怖かったです」
「すみません。もう少し詳しく教えてください。奥さんは一階から上がってきたのですか？」と俺は聞いた。
「分かりません。でも、誰かが階段を登る音は聞こえました」
「従業員の方はどこから？」
「分かりません」
「オーナーは？」
「分かりません」
「では、なぜオーナーは警察に電話をしに行ったのでしょうか？」
「分かりませんけど、女の人が血まみれだったら警察に電話をするんじゃないんですか？」
「普通はまず救急車じゃないでしょうか？」と俺は言った。
彼女ははっとして、「それはそうですね」と言った。

「なぜ警察に電話をしに行ったと思ったのですか？」
「それは……、ああ、思い出しました。ピアスをした男の人が、『警察に電話だ』と言ったんです」
「それは確かですか？」
「確かです」
「分かりました」と俺は言って、メモをとった。そして佐々木を見て、また顎で彼を促した。
「では、次はリビングでのことですが、皆がリビングに集まったあと、どうされましたか？」
「どうもこうも。少し、いざこざがありました。それ以外は……」
「いざこざというのは？」
「犯人が誰だとか、そういったものです。皆さん、特にピアスをつけた方が疑心暗鬼になられていました」
「なるほど」
「花城さんはどう思われました？　犯人について」
「どうって、外に逃げたと思いました」
「なぜです？」
「窓が開いていたからです」
「建物の中に残ったとは思いませんでしたか？」
「少しは思いました。でも……」と花城は黙った。
「でも、何ですか？　正直に話してください」
「いや、ただそう思っただけです」と花城は言ったが、何かを隠しているように思えた。
「では、万が一、犯人が逃げていないとしたら、どう思います？」
「怖いです」
「もっと言うならば、真田さんが犯人だとしたらどう思います？」
花城はゆっくりとこっちを見た。
「それはないと思います」
「なぜですか？」
「勘です」と花城は言いきった。

「勘……ですか」と佐々木は戸惑いながら言った。
「わかりました。ありがとうございます。もう少しお部屋に待機してもらっても構わないでしょうか」
「はい。それは大丈夫なんですけど、今日中にはここから帰れるんでしょうか？」
「ええ、もちろん大丈夫ですよ。その代わり連絡先を教えてもらうことになりますが」
「はい。それは構いません」と彼女は言った。何か予定があるのだろうか？
「何か予定が？」と佐々木が聞いた。
「いえ、何もないんですが、ずっとここにいるのは……」
「まぁ、そうでしょうね。でも大丈夫ですよ」と佐々木は彼女に微笑んだ。こいつは美女に弱いのだろうか。まぁ、強い男なんていないだろうが。
「ああ、あと最後に。手袋は持っていますか？」
「手袋ですか？　持っていますよ。鞄に入っています。茶色の毛糸のものです」
「そうですか。わかりました。ありがとうございます」
とりあえず彼女に対する聞き込みはそれで終わった。俺は次にピアスをつけているという、もう一人のお客に話を聞くことにした。

二階正嗣の証言

【二階正嗣の証言】

「そうですよ。にかいまさつぐ、です」
「二階さんは、こちらにいつ到着しました？」
「あの、それが何か関係あるんですか？」
「ええ、関係する場合もあります。詳しいことは言えませんが」と佐々木は言った。
　二階正嗣は今どきの若者といったような風貌だった。短い髪の毛を立て、眉を細く整え、左耳にはリングのピアスをしていた。もしかしたら刺青もどこかに入っているかもしれない。やんちゃそうな男だ。年齢は二十五歳。N市に住んでいて、アルバイトで生計を立てているそうだ。
「ここへは車で来たんですか？」と佐々木は続けた。
「普通、そうでしょ。こんな山奥ですよ」
「何時頃？」
「よく覚えていないけど、四時くらいかな」
「N市から直接ここへ？」
「そうだけど？」と二階はわざとなのか、態度を悪くして言った。
「二階さんは午後三時に、ペンションに予約の電話をしていますね。それはどちらから？」
「携帯電話ですけど」
「それはペンションへ来る途中ということですか？」
「そうですけど？」
「正直に話してもらいたいのですが、ペンションに来る途中に宿泊の予約をするのはおかしくないですかね？　ペンションが宿泊客で満杯だったらどうするつもりだったのですか？」
「さぁ、他のホテルに泊まったと思うけど」

「嘘はついていないと」
「もちろん」
「今回はどういった要件でこちらへ？」と俺は聞いた。
「スノボをしに来たんです」
「スノーボードはよくされるんですか？」
「冬はよくしますねー」と二階は言った。
そりゃあ、冬のスポーツだからな、と俺は心の中で言った。
「そうなんですか……。この冬は、もう何度もこちらへは来られているんですか？」
「ええ、来てます。あの山浪（やまなみ）スキー場、有名ですし」と彼は言った。
だが、そう言う割に彼の肌は白かった。そんなに滑っていないのかもしれないな。
「ということは、板や服とかも持ってきているのですか？　手袋とかも」
「え？　いやぁ、今回は何も持ってきてないっすね」
「ああ、そうなのですか」と俺は言って、佐々木を見た。明らかに疑いの目で二階を見ていた。睨んでいると言ってもいいくらいだった。
「では、スキー場で一式、借りるつもりだったのですか？」
「ええ、そうです。ボードとか荷物になるでしょ？」
「まぁ、そうですね」と俺は言った。
「では、午前零時五十分頃の話を聞かせてください」
「ああ、あの時間帯ね。さっきの刑事にも言ったんだけど？」
「もう一度お願いします。確認の意味もあります」
「ああ、分かりました。えーと、確か大きな声がしたんです。男の声で。そして、部屋を出たら、ドアが開いている部屋がひとつあったんで、そこに行ってみました」
「ちなみに二階さんが泊まっていた部屋はどこです？」
「俺の部屋は二〇五です。左奥ですね」
「分かりました。では、声を聞く前に、部屋では何をなされていた

んですか？」
「部屋ですか？　携帯いじってましたけど」
「そうですか。分かりました。続きをお願いします」
「えーと、どこまで話したっけ。ああ、あそこだ。ええと、そして、ドアが開いている部屋に行ったら、あの黒髪の女の子がいて、部屋の奥っていうか、真ん中あたりに男の人と女の人がいました。女の人の頭は赤かったです」
「そのあとは？」
「そのあとは、ペンションの人たちが来て、誰かが『警察』って言ったんです。で、俺も『警察に電話だ』って言いました」
「女性、磯台さんが死んでいると分かりましたか？」
「いや、分からなかったです。でも、生きているような感じはしなかったすね。動いていなかったし」
「『警察』と言った人は誰か分かりますか？」
「いや、分からないですけど女の声でしたよ。確か」
「部屋にいた女性、磯台さんではなくて、黒髪の女性の方なのですが、手袋か何かしていました？」
「いや、そんなとこまで見てないですよ」と二階は言って笑った。
「そうですか。ところで、磯台さんとは今回初めてお会いになりました？」
「ええ、もちろん。ディナーが一緒でしたよ。それが初めてですけど……。もしかして俺を疑ってるんですか？」
「いえ、そういうわけでは。この類の質問は全員にしていますので、心配しないでください」
「そうなんだ」と言って二階はワックスを塗った髪の毛をいじった。
「ディナーの時は、何か思いませんでしたか？　磯台さんや、他に人に対して」
「いや、特に……。あ、でも殺された人は俺のことじろじろ見てたな。彼氏がいるのに、なんだろうって思ってましたよ。ああ、でも俺だけじゃなくて従業員の人も見てたな。料理を運んできてくれた、

背の高い、日焼けした人」
「なるほど」と俺は言って手帳にメモをした。この証言は花城の時にも出たな。なぜ磯台は人をじろじろと見ていたのだろうか。
「オーナーさんにリビングに集められましたよね？　その時の話を聞かせてください」
「ああ、俺はちょっと疑心暗鬼になってたんで、結構人に当たっちゃったかもしれません。今は反省しています。『お前が犯人なのか？』とか『殺人鬼は誰だよ』とか言ってしまいました。朝になったら疑心暗鬼もなくなっていたけど。でも、だって、俺、あの中に犯人がいるって思ったんですよ。特に殺された人の彼氏。怪しすぎ」
「なぜ犯人が中にいると思ったのですか？」
「え？　だって外は吹雪ですよ？　普通外に出ないでしょう」
「ペンションの中に隠れているという場合もありますよね」
「ありましたけど……。あの、実は俺一人で、ペンションの中捜索したんです。トイレに行くふりをして」
「そうなんですか？」
「ええ。隠れていないだろうけど一応。もちろんどこにも隠れていませんでした。怪しいのはやっぱりリビングにいた連中ですよ。特に彼氏が怪しいと思いますね」
「なぜ真田さんが怪しいと？」
「え？　だって一番近くにいたし。だいたい、あの人しか動機がないでしょう。どんな動機か知りませんけどね。それに、他の人が動機を持っていたってありえるんですかね？　あの時初めてあったのに。とりあえず客の方に動機はないですよ」
「花城さん、黒髪の女性や、従業員の方が磯台さんと知り合いという可能性がありますよ」
「本当ですか？　信じられないなー。知り合いなら話しかけたりするでしょう。あー、でも険悪な仲だったのかなー？」
　とりあえず二階に色々な可能性があることを示してみたが、重要なことは聞けなかった。だが、たぶん二階も花城も、磯台香代のこ

とはここに来るまで知らなかっただろう。だが、署に帰ったらもう少し詳しく調べないとな。もしかしたら接点が見つかるかもしれない。磯台の方にはなくても、真田と接点があったとしたら、それが動機に繋がる可能性もある。
「では、ありがとうございました。また何かあったらお部屋に伺いますので待機お願いします」
「分かりました」と二階は言って、椅子から立ち上がり部屋を出て言った。
「僕、あの男嫌いです」と部屋のドアが閉まるのを見届けて、佐々木が言った。
「嫌いもくそもあるか。ちゃんと話を聞け」
「すみません」と佐々木は目を伏せた。
「にしても、二階は嘘をついているな」
「ええ。たぶん、N市からここへは直接来ていませんよ。スキーもよくやらないみたいだし」
「ああ。奴に関しては昨日の行動をもっと確かめる必要があるな」
「ええ。まぁ、僕の予想なんですが、たぶん彼はスキー場からここへ来ていますよ」
「なぜだ？」
「勘ですけどね。スキー場からここまで来るのにだいたい一時間だからです」
「勘だな」
「ええ、勘です」
それから、俺と佐々木は、そこでお互いメモしたことを確認した。
すると「おい」と中島が部屋に入ってきた。
「どうした？」と俺は聞いた。
「凶器と思われるものが見つかったそうだ」
「本当ですか？」と佐々木が言った。
「ああ。二〇二の窓から見える森の中だ。雪に半分埋まってたみたいだ」

「で、凶器は？」
「ハンマーだ。血がついてる」
「ハンマー？」
「ああ、ハンマーだ。小型の。トンカチより少しでかいが、持ち運びには問題ないだろう」
「うん」と俺は顎に手をあてた。
「で、従業員にも話を聞いてきたんだが……」
「俺たちも行こう」と俺は佐々木に言った。
「はい」と佐々木は返事をした。
「彼らはダイニングにいる。一人ひとりリビングに呼んで話を聞くといい。俺はもう一度現場を見て、もう一度客に話を聞いてみる」
「分かった。何かあったら呼びに来てくれ」
「分かった」と中島は言うと、部屋を出て言った。
「では、誰の話から聞きましょうか？」。佐々木は手帳を見ながら言った。
「オーナーからいこう」。俺はそう言い、一階へと向かった。

矢野幸一之介の証言

【矢野幸一之介の証言】

「こういちのすけ、さんですか。珍しい名前ですね」と俺は言った。
「そうでしょう。祖父からつけられたものなんです。私は四人兄弟の末っ子なんですが、親父が名前なんてどうでもいいと思ったのか変わり者の祖父に任せまして。そしたら、こんな名前ですよ」とペンション矢麻野依（やまのい）のオーナーは笑った。
「ペンションの名前も変わっていますね」
「ええ、これは順番を入れ替えたら娘のフルネームになるんです」
「ああ、なるほど」と佐々木は言った。
「このペンションは長いのですか？」
「十年くらいでしょうか。私はもともと、自分の経営しているレストランでシェフとしても働いていたのですがね、そこの経営を娘と娘婿に任せて、私はここでこう暮らしているわけです。趣味が仕事みたいな生活です。山奥ですから、人も来ませんし。値段も安くしているので、利益なんてあまり出ないんですが。まぁ、でも貯金はあるし、レストランの利益があるので問題ないのですがね」
「レストランの名前は何と言うのでしょう？」
「リリアーヌです」
「もしかして、N市にある？」と佐々木が聞いた。
「ええ、そうです」
「そのレストランなら知っています。有名ですよね。雑誌にもよく掲載されていますし」
「おかげさまで、はい。私がシェフを辞めてからさらに味も良くなりましたし」と言ってオーナーは笑った。「娘が連れてきた男が、随分と腕のいいシェフで、私はかないませんでしたよ。料理人としては悔しいですがね。でも、娘の親としては嬉しくも思いました」

「昨日は矢野さんが料理を？」
「ええ、そうです。料理は私と、ここで働いてくれている如月（きさらぎ）くんとで作っています」
「如月さんというのは、従業員の方ですか？」
「ええ。いい青年です。本格的に料理の修業をすればいいと思っているのですが、スキーがしたいということで」
「そうなんですか。でも、ここからではスキー場は遠いですよね」
「ええ。でもここがいいと彼はよく言っています」
「そうですか」と佐々木は言ってメモをとった。
オーナーは白髪が目立ちはじめた頭を撫でつけた。
「昨日のことなんですが、磯台さんを最初に見たのは何時頃でしょうか？」
「昨日ですか？　昨日は十一時くらいですね。真田さんという大柄の方とお見えになったので、荷物を部屋に運ばせていただきました」
「何かおかしな点は？」
「おかしなところはなかったですね。ただ今回は男の人と一緒か、と思っただけです」
「このペンションには何度か泊まられているんですか？」
「ええ。二、三回じゃないでしょうか。宿泊のデータがあるんで、それを見ればきちんと分かります」
「あとで、見させてもらっても？」
「ええ、構いません。そういったものは家内に任しているので、家内に聞いてください」
「それから、磯台さんを見たのは？」
「えーと、夕食の時ですかね。何時かは覚えていませんが、一度テーブルの方へ行って、味の方を聞きました」
「どんな反応でしたか？」
「『美味しいです』と言ってくださいました。お連れの男の方も、そうです」
「その時、他の方はダイニングにいたのですか？」

「ええ。他のテーブルも周りました。特におかしなところはなかったです」
「そうですか。磯台さんが誰かをじっと見るようなことは？」
「まぁ、挨拶だけなのでよく分かりませんが、なかったですよ。お連れの、真田さんでしたっけ。その方を見ているのは分かりましたけど」
「そうですか。では、次に午前零時五十分頃のことを聞かせてくれますか？」
「ええ。私はキッチンにいました。キッチンで食材をチェックしていたんです。何があるとか、何を買い足さなきゃならないだとか、そういったことです。そうしたら、どこからか大声が聞こえてきて……。それでも、あそこはキッチンから離れていますからね。何と言っているかは分かりませんでした。でも、外が吹雪でしたし、空耳かなと思ってたんですが、だんだんと気になって、もし何かあったらいけないと思い、どこから聞こえてくる声なのか、ペンションの中をまわりました」
「どんなふうにまわりました？」
「キッチンから、私たちの居住スペースに行って、リビングに。そしてフロントの方へ行ったら、二階から声がするので、行ったんです。そうしたら、磯台さんが頭から血を流しているのが見えて……。驚いて、そこから動けなかったのですが、誰かの『警察に電話だ』という声を聞いて、一階に降りました。そしてフロントから警察に電話をかけました」
「磯台さんが亡くなっていることを確認しましたか？」
「いえ、私はしませんでしたが、家内が降りてきて『亡くなっている』と。だから、それを警察に伝えました」
「なるほど」
「警察の方からは、とりあえず現場のものに触らないように、そして、上にいる人たちを集めて、朝まで待機させてくださいと言われました。吹雪で、到着が朝になるだろうということも言われた気が

します。そこで、とりあえず受話器を置いて、二階に行きました。皆さんをリビングに誘導して、真田さんには着替えてくるように言いました。そのあと、私は部屋に入り、磯台さんの様子を見て、毛布をかけました。そして、リビングに戻って、家内と如月くんにお茶か何かを出すように頼みました。それから、また二階に戻って、二〇二に真田さんがいるのを見つけたので、リビングに連れていきました」

「ドアを閉めたりしました？」

「いいえ、開けたままです。でも、窓は閉められていました。たぶん真田さんが閉めたのでしょう。あのままじゃ寒いでしょうし」

「そうですか。続けてください」

「そのあと、また警察の方と話しました。磯台さんがどういった様子で倒れていただとか、部屋の様子を伝えました。そのあと電話を切って、リビングへ戻りました」

「リビングの様子はどうでした？」

「どうもこうも、悪かったですよ。二階さんが真田さんに暴言を吐いていて、真田さんは茫然として目に涙を浮かべていました。如月くんが二階さんをなだめていたんですが……。花城さんはぼーっとしてました。何が起こったか、よく分からないといったような感じで。私はテレビをつけてみました。風のせいで映りが悪かったですが、見られないほどではなかったです。私たちはお茶を飲みながら朝までそこを動きませんでした。何度かトイレには立ちましたけどね。皆さん、すぐに帰ってこられましたよ。どこに犯人がいるか分かりませんからね。ああ、でも二階さんは少し長かった気がします。十分か十五分くらい帰ってこなかった時がありました」

「朝を待っている時、皆さんは何をされていたか覚えていますか？」

「ええと……。私は家内の傍に座っていました。お茶のお代わりなどは全て如月くんがやってくれました。なので、如月くんは二、三度キッチンへ立ったと思います。二階さんは落ち着かない様子で、携帯電話をよくチェックしていました。真田さんは顔を押さえてい

ました。泣いていたのかもしれません。花城さんは、いつの間にかソファで寝ていました。なので、私が毛布を持ってきてかけました」
「他の人は寝たりしていないんですか？」
「家内が私のそばで寝ていました。あとの四人は起きていたと思います。長い時間でした」
「なるほど」と佐々木が言った。
「そういえば、建物の入り口は何か所あるのでしょうか？」と俺はオーナーに聞いた。
「二か所です。玄関と、裏口です」
「裏口はどこにあるのでしょうか？」
「玄関の真裏ですね。私たちの居住スペースにあります。私たちはそこを使って外に出るんです」
「その居住スペースにはいくつ部屋があるのでしょう？」
「三つです。リビングと寝室が二つです。一つは来客用に使います。だけど、ここ数年は使っていません」
「寝室に窓はあるのですか？」
「あります。私たちの寝室も、客室と同じつくりになっています」
「如月さんはどこで寝泊まりを？」
「彼は屋根裏部屋です。裏口横の階段を登っていくと、あります」
「昨日は、裏口は開いていました？」
「戸締りはしました。家内と如月くんが外に出ていないかぎり、閉まっていたと思います」
「裏口の鍵は誰が持っているのでしょう？」
「私と家内、あと如月くんも持っています」
「そういえば、随分と広い駐車場を持っていますね？」
「ああ、あれですか。いや、恥ずかしいことなんですが、私が車の運転苦手なんです。特に駐車が。普段は運転しないので、いいんですがね。万が一のことを考えて駐車場を広く作ったんです」
「なるほど」と俺は言って手帳にこれらのことをメモした。「とりあえず、これくらいです。またお話を伺うと思うのですが、その時

はよろしくお願いします」
俺がそう言うと、佐々木はオーナーをダイニングへと連れて行った。
オーナーは部屋を出る時、軽く頭を下げた。
すぐに佐々木は帰ってきて「次は誰にしましょう？」と言った。
「オーナーの奥さんにしよう」と俺は言った。

矢野リリアーヌの証言

【矢野リリアーヌの証言】

オーナーの奥さん、リリアーヌさんはフランス人だ。彼女は金色の長い髪を持っていた。海外にあまり行ったことのない俺は、その透けるような金色をあまり見ないようにしながらも、気になってついつい見てしまっていた。彼女はその金髪を後ろで一つに結んでいた。当たり前だか、顔の彫は深く、彼女の顔からは日本人女性にはない勇ましさや、優雅さのようなものを感じた。瞳の色はブルーだった。

「オーナーの幸一之介さんとは、いつ知り合ったのですか？」

「三十年前です。彼がフランスにフランス料理を学びにきた時に知り合いました」

「そのあと日本に来たわけですか。日本はもう長いのですか？」

「もう二十五年住んでいます」と彼女は言った。少し緊張しているのか、まばたきを多くしていた。

「どうですか日本は？」と佐々木は聞いた。

「素敵なところです。初めて来たとき、なんとなくですけど祖父母が住んでいたドイツを思い出しました」

「どうして日本へ来られたんですか？」

「幸一之介がいたので、来ました。日本にも興味があったので。それ以来、ずっと日本です。年に一回はフランスの方にも帰りますけど」

「では、昨日のことをお聞かせください。まずは真田さんと磯台さんのこと。何時頃、ここへ到着されました？」

「たしか午前十一時だったと思います。昼食をまだとっていないということでしたので、パスタとサラダを主人が出しました」

「それから？」

「それから、夕食の時間までお部屋で休まれていたと思います。夕食は六時からだったので、その時また電話をすると伝えました」
「磯台さんと真田さんは何度もこちらへこられていたんでしょうか？」
「真田さんは初めてお見えになりました。磯台さんは、二、三回宿泊されています」
「なるほど。次はどなたがお見えに？」
「次にお見えになったのは花城さんです。午後二時くらいだったと思います」
「花城さんはいつ宿泊の予約をしたんでしょうか？」
「一週間前です。インターネットでも予約を受け付けているのですが、直接電話をいただきました」と彼女は言った。まばたきの回数は減っていた。
「何泊する予定で？」
「一泊とのことでした」
「なるほど。そして次に二階さんですか」
「はい。二階さんは、その日に予約の電話を頂きました」
「何時頃ですか？」
「たしか、三時です」
「なるほど。到着はいつでしたか？」
「四時半くらいでしょうか。道に迷ったとおっしゃってました。街の方からは、ずっと真っ直ぐ進めばいいので分かりやすいんですが、スキー場の方からは分かれ道がいくつかあるので」
　つまり二階はスキー場方面から来た可能性が高いということだな。
「皆さん変わった様子はありませんでしたか？」
「ええ、特には」と彼女は言って思い出したように「ああ、やっぱり予約の電話は三時で合ってます。花城さんにお茶を出していたら、電話が鳴ったので」
「それは確かですか？」
「ええ。時計を見ました」

「では、夕食の時なのですが、何か変わった点はありましたか？」
「特に思い当たるようなことは……」
「そうですか。では、午前零時五十分頃の話を聞かせてください」
「はい」とリリアーヌは言って、愁いの感情を瞳に出した。
「私はリビングにいました。テレビで天気予報を見てから寝ようと思っていたので。そうしたら大きな声が聞こえて……。テレビを消して、声のしている二階に行きました。声のしている二〇二号室に行くと、二階さんと、花城さんがいました。その奥に真田さんと……磯台さんが……」と彼女は言って言葉をつまらせた。
「如月さんはいましたか？」
「いえ。彼は私の後に来ました。『どうしたんですか？』と私に言いました。私は『分からない』と返しました。そして、如月くんが『警察に』と言ったので、驚いて『警察？』と聞き返しました。そうしたら、二階さんが『警察に電話だ』と仰って。いつの間にか来ていた幸一之介が電話をしに一階へ戻りました。如月さんは、部屋に入って、磯台さんを見ると『死んでいる』と……。私はそれを伝えるために一階に。伝え終えると、また二階に戻りました」
「なるほど」と俺は言った。佐々木は熱心に何かをメモしていた。
「では、その後のことを」
「はい。そのあと幸一之介が私たちを呼びに来ました。そしてリビングに行って、私と如月くんはお茶を出しました。リビングで朝までいるのは辛かったです。皆さん、心配そうでした。でも、花城さんが寝始めるのを見て、なんとなく私も安心してしまって、そのまま少し寝てしまいました」
「何か気になったことはありましたか？」
「特に何も。ただただ怖かったです」
「わかりました。ありがとうございます」と俺は言った。「ああ、そうだ。内線電話の履歴など見れますかね？」
「はい。見ることはできます」
「あとで見せてもらっても？」

「はい。大丈夫です」
俺は佐々木に目配せをして、最後の人物を連れてきてもらうよう頼んだ。彼はリリアーヌを連れて、リビングから出て行った。
たばこが吸いたいな。だが今は堪えどころだ。最後の人物の話を聞いたら、事件の全容がなんとなく見えてくるだろう。

如月めぐむの証言

【如月めぐむの証言】

「父親がブラックジャックのファンでね。だからこういう名前なんですよ。個人的には好きでも嫌いでもないです」

如月はそう言うと、ストレートの黒髪をゴムで後ろにまとめた。顔は雪焼けのせいで、焼いた煎餅のように黒くなっていた。如月はスキーをよくやるらしい。

「いつからここで働いているんですか？」と佐々木は聞いた。

「三年前ですね。オーナーは地元で有名なシェフだったし。僕はスキーが好きだったし。運よく求人が出されていたし。まぁ、そんな感じで働き始めました」

「もともとは料理人を目指しておられたんですか？」

「ええ、まぁ。目指していたというより、なれればいいな、くらいの夢でした。だから僕はいまだに料理人になれていないんですよ。迷っているのかもしれません」と如月は笑顔を作った。

「では、さっそくですが色々と教えてもらいますか？」

「ええ。さっき刑事さんに行ったことと、同じようなものでいいのなら」と彼は頷いた。

「磯台さんに初めて会ったのはいつですか？」

「初めて会ったのは二年前ですね。お客さんとして、まぁ、あたりまえですけどいらっしゃいました」

「その時は一人で？」

「ああ、どうだったかな。うーん、あ、二年前、僕が初めてあった時は女性と一緒でした」

「女性の名前などは覚えていますか？」

「いいえ。そこまでは。その一度しか見ていないですし」

「女性とはどういった仲だったか分かりますか？」

「友達のようでしたよ。と言っても、彼女たちと接する機会はあまりなかったですね。僕はキッチンとダイニングでしか作業していませんし。もちろん、ベッドメイクもしますけど、それはお客さんが外に出て行った時にやりますし」
「ところで、磯台さんはいつもどうやってペンションに来られていたんでしょうかね？」
「車じゃないですか？　あ、でも違うな。確か彼女は車の免許を持っていないって言ってた気が……。もしかしたらタクシーかもしれません。あー、でもタクシーじゃ高くつくなぁ」
「では昨日は、何時頃、磯台さんに会いましたか？」
「昨日ですか？　午後六時くらいにダイニングで。料理を運んだ時ですね。彼氏さんなのかな、真田さんという方が一緒でしたよ」
「何か磯台さんに変わった点などありました？　気になったところでも」
「いえ、特に。僕は『また来ていただいて、ありがとうございます』と言ったんですが、『またお世話になります』と普通に答えていましたよ。誰かに殺されるような心配があったようには思えません。まぁ、殺されるとは思っていなかったんでしょうけど」
「磯台さんが誰かをじろじろと見たりはしていました？」
「じろじろですか？　えーと。ああ、なぜか他のお客さんを見ていましたね。女性の方と、あの二階っていう男の人です」
「どういったふうに？」
「いやぁ、まぁ、どういったふうにと言われても困るんですが、ちらちらと。何か気になったのかもしれません。宿泊客も少ないですし、その人たちがどんなに普通でも視界に入りますからね」
「なるほど。では午前零時五十分頃の話を聞かせてください」
「ええ。僕は自室で、屋根裏部屋のことなんですけど、寝ていました。そうしたら大きな声が下から聞こえて、なんだろうと思って二階に行きました」
「屋根裏部屋に窓はありますか？」

「ええ、ありますよ。横に長いやつで、上にパカっと開くタイプのものです。窓は玄関側の方についています」
「その窓から人は入れますか？」
「え？」と如月は驚いた表情を見せた。「ええ、まぁ、横になれば……。でも降りれる場所なんてありませんよ？」
「そうですか。いや、なんでも聞くのが商売なもので」と俺はわざと笑った。
「二階へは直接行けるのですか？」と佐々木が聞いた。
「いや、まず一階に降りてから行かないとダメですね。僕はリビングを抜けて、階段を登って二階に行きました。二階に着くと、二〇二号室に人が集まっていました。中で真田さんが磯台さんを抱えているのが見えました。磯台さんはぐったりとしていて、頭は血で真っ赤でした。だから僕は『警察に』と」
「なぜ警察に？　救急車では？」
「ああ、その時は救急車だとは思いませんでした。なぜかと言ったら取り乱していたというのが一番わかりやすい理由かもしれません。あと、僕は前に自動車事故を起こしたことがあって、その時、間違えて救急車を呼んだことがあるんですよね。で、まぁ、その時のこともあって、とりあえず警察を呼べば、救急車もついてくるんじゃないかと……。恥ずかしいですね」
「で、オーナーさんが警察に電話したと」
「はい。そうみたいですね。僕は部屋に入って、磯台さんがどういった状態なのか見てみました。残念ながら死んでいました。脈も確かめたし、瞳孔が開いているかどうかも見ました」
「何か気付いたことは？」
「何も。窓が開いていたことだけです」
「リビングに戻ったあとのことは？」
「奥さんと一緒にお茶を出して、それだけです。朝までテレビを見ながら起きていました。あとは、二階さんが取り乱していたので落ち着くよう言いました。真田さんのことを色々と言っていましたね。

幼いです」と如月は最後、呟くように付け加えた。
「何か気付いたことは？」
「なにも」と如月は首を横に動かした。
「些細なことでもいいんですが」
「なにも」
「そのあと二〇二号室へは行きました？」
「行っていません。あれから二階へは行っていません」
「分かりました。ありがとうございました」

ペンションを出ると、俺たちは車に戻った。佐々木はエンジンをかけ、ゆっくりと駐車場を出た。
「署に戻って、まだまだ色々と調べないといけませんね」と佐々木は言った。
「そうだな」と俺は行ってタバコを胸ポケットから出して、車に置きっぱなしにしていたライターで火をつけた。
「真田が一番怪しいですけどね」と佐々木は言った。下り坂を慎重に運転していた。
「なぜそう思う？」
「え？　まぁ、まだ色々調べないといけないことはありますけど、動機がありそうなのが真田くらいしか見当たりません」
「従業員は？」
「もしかしたら、何かあるかもしれませんけど……」
「客は？」
「……。藤堂さんは誰が怪しいと思っているんですか？」
「俺は……。まぁ、詳しいことは言えんよ。ただ真田じゃないとは思っている」
「なぜです？」
「勘だ」
「勘って」と佐々木は驚いたのか少し声が大きくなった。
「ただ、真田の涙は本物だと思っている。あれは人を亡くした奴の

涙だよ。嘘泣きじゃあない」と俺は言って、煙をゆっくりと肺にいれた。そして、体に入っていたものを全部出すように吐いた。

佐々木はそれから署に着くまで黙っていた。たぶん気を使ってくれたんだろう。

妻が死んで、まだ二カ月しか経っていない。

彼女を殺した人を知っている

【彼女を殺した人を知っている】

香代が殺されてから二日後、警察は花城柚希の逮捕状をとった。だが、花城は見つからなかった。といより、花城という人物なんてこの世にはいなかったのだ。いや、それも違う。いるだろうが、彼女は花城柚希ではなく、他の誰かなのだ。マスコミに彼女の似顔絵が公開された。長い黒髪の可愛らしい女性だった。芸能界にいてもおかしくはない。だが、彼女の写真はどこからも出てこなかった。高校の頃のアルバムもなく、自動車の運転免許証さえ偽造だった。いったい彼女は誰なのか。僕も警察も、世間もそれを気にしていた。だが、そんなことより僕は、なぜ、彼女が香代を殺したのか、それが一番気になっていた。

そして、あの事件から五日経った今でも、彼女は見つかっていない。

僕は仕事にも身が入らなかった。何度かつまらないミスをした。僕はずっと彼女のことを考えていた。

家には七時に着いた。マンションの七階に僕の部屋はあった。そこまで大きくない部屋だが、独り身の男にとっては十分だった。ドアの前に立つと、僕は鍵を取り出してドアを開けた。ドアを開けて中に入ろうとすると、後ろから何かに押され、倒れるように部屋の中に入った。すると玄関の電気が点いた。僕は転がりながら部屋へと逃げた。後ろを見ると、そこに見覚えのある人物が立っていた。花城柚希だった。髪を短く切っていたが、童顔の可愛げのある顔は変わっていなかった。いや、髪を切ったせいか、さらに幼く見えた。

「お前」

「こんばんは、真田さん」

「お前」と僕は言いながら僕は電話機のあるベッドの近くに寄っていった。
花城は履いていたスニーカーを脱がずに部屋に上がってきた。彼女はジーンズに緑色のパーカーを羽織っていた。首には白いマフラーをしていた。
「電話はやめてください」
「なんだと？」
「警察に電話をするならやめてください。あと数時間なんです」
「何がだ？」
「こっちの話です。気にしないでください。とにかく電話は」と言って、花城は手で電話機を抑えるような仕草をした。右手はパーカーのポケットに入っていた。
「僕のことも殺すつもりか？」と僕は彼女の右手を見て言った。
「いいえ。そんな余計なことはしません」と彼女は言って右手をポケットから出した。
「今から警察に電話する」
「あなたはそんなことがしたいのですか？」と彼女は首を傾げた。
「そんなことより、私が磯台さんを殺した動機が知りたいんじゃないんですか？　もし、警察に電話をしないのなら教えましょう」
僕は一瞬考えた。警察に電話するべきか、否かを。だが、判断は早かった。僕は奴が香代を殺した動機が知りたかった。警察にはその後でも遅くはない。僕は机のそばにあった椅子に座った。
「助かります」と彼女は言った。
「なぜ殺した」と僕は花城を睨んだ。
「まず、ある人のことを話しましょう」
「ある人？」
「そう、ある人。その人の名は『石白美沙希（いしじろみさき）』。あなたの元彼女です」
「それが何だ。何の関係がある？」
彼女は白くて柔らかそうなマフラーを少し緩めて言った。

「私は、彼女を殺した人を知っている」
僕は黙っていた。香代を殺したのか知りたかったのに、美沙希の名前が出てくるのは意外だった。そして、美沙希が殺されたということは予想外すぎた。
「何を言っているんだ？　彼女は自殺だ。確かに僕が殺したようなものだが」
「いいえ。彼女は自殺に見せかけられて殺されました」
「そんなわけはない」
「一昨年の十月九日、夜、十一時に彼女は磯台香代さんの住むマンションに呼び出されました。美沙希さんは車で訪れました。そして、もしかしたら、真田さんも知っているかもしれませんが美沙希さんは、磯台さんのマンションへ着くと、まずトイレを借ります。これは、いつもそうらしいです。警察は知らないでしょうが」
僕は黙って聞いていた。何が何だか分からない。ただ彼女の声には芯があった。耳に届くというより、体の中に響く感じだった。
「磯台さんは相談があると言って呼び出したそうです。相談することなんてなかったのですが。そして、美沙希さんがトイレに行っている間に、磯台さんは車のトランクにあるものを入れました。七輪と練炭、そして折りたたみ自転車です」
花城はこちらをちらりと見た。そして続けた。
「そして彼女たちは真夜中のドライブへ行きました。殺人現場へは磯台さんが案内しました。山の中に入っていくので不安だったでしょうね。でも、彼女たちは友達です。不信感は特になかったでしょう。山の中に、車を停めると磯台さんは、美沙希さんにコーヒーをすすめます。水筒に入れて持ってきたのです」。彼女は少し右に移動した。
「ああ、その前に知っていましたか？」
「何をですか？」
「美沙希さんが不眠症で悩んでいたことを？」
「いいえ」と僕は言った。初耳だった。

「そして磯台さんも眠れない時があった。知っていました？」
「それは、知っていました」と僕はいつの間にか敬語を使っていたことを恥ずかしく思った。彼女の雰囲気は犯人を詰問する刑事のようだった。
「その不眠症の相談を磯台さんにしていたみたいです。そして、磯台さんは自分に処方されている睡眠薬を少し分けていた」
「それで？」
「もう分かるでしょう。睡眠薬いりのコーヒーを飲ませ、その間に練炭を焚いて一酸化炭素中毒で殺した。だが、問題は目張りです。窓に目張りをしなければならない。そして、それは内側からしないといけない。どうしたと思います？」
「分かりません」
「どうもしていません。助手席のドアの目張りは不完全でした。ですが、警察は自殺と決めつけて捜査しました。馬鹿です。私が香代さんを殺したと、あの現場で結論を出さなかった刑事たちくらい阿呆です。おかげで助かりましたけど」
彼女は肩をすくめた。
「そのあと、磯台さんは折りたたみ自転車を使って家へと帰りました。何時間かかったのでしょうね。それでも朝までには帰れたようですが。そして磯台さんは、部屋に自転車を持ち込み、タイヤについている泥を落としました。そして警察が来る時を待ちます。彼女は家にいたと嘘を言います。電話をしたが、用事があるので断られたと。全く……」と彼女は最後まで言葉を続けなかった。
彼女は僕を見た。僕は彼女の言葉を待った。彼女はそれが分かったのか、答えた。
「美沙希さんを殺した動機は……。まぁ、簡単に言うならば、あなたのことが好きだったからですよ。知っていたでしょう？　何度か夜を共にしたことあるでしょう？」
僕は、ごくりと唾をのんだ。
「まぁ、別にそういう事があっても悪いことではありません。あな

たは美沙希さんが死んで悲しかったのでしょう。そして磯台香代さんに慰めてもらった。磯台さんの思うがままですが、それはそれで」
「それが、いや、だからって、なぜ君が香代を殺すことになるんだ」
「そうでしたね。あなたが聞きたかったこと。それは、なぜ私が香代さんを殺したのか。……簡単です。それは美沙希さんから頼まれたからです。私は霊能力があってね」と言った。
　僕は怒りが沸いてくるのを感じだ。
「ふざけるな！」
「まぁ、そう言うでしょうね」と彼女は僕の感情を真面目に受け止めていないのか、平気な顔をして言った。「でもそれが動機です。頼まれたから殺したまでです。内線電話で彼女に美沙希さんの事を匂わして、部屋に入れてもらいました。そしてハンマーで殺し、それを窓の外に投げました。彼女には何も言っていません。なぜ私が、あの事を知っていたのか不思議そうでしたがね。言う必要性は感じませんでした。私は仕事をしたまでです」
「それから？」
「それから？　まだ言わないとダメなんですか？」
「どうやって外に、部屋の外に出た？」
「出ていませんよ。内線電話であなたを呼び出したあと、私は浴室に隠れました。あなたが入ってきて、大声で香代さんの名前を呼んだ時に、そこから出てきただけです」
「穴だらけだな。そこを僕や、誰かに見られたらどうするつもりだったんだ？」
「どうもしませんよ。その時は逃げたでしょう。あの吹雪の中を」
　僕は黙っていた。それを見て、彼女は部屋から出て行こうとした。
「待て！　どこへ行く」
「街へ出かけるんです」
「今から警察を呼ぶ。そこにいろ」
「全く……。警察は勘弁してください。正直言って、私がここに来たのは、あなたが動機を知りたかっただろうからっていう、私の善

意ですよ。来なくてもよかったんです」
「その善意が裏目に出たな」
「はぁ」と彼女はため息をついた。「では、警察を呼ぶ前に私の悪意を見せましょう」
「悪意？」
「あなたは浮気をしていた。二週間という短い期間を。いや、それが短いかどうかは人それぞれです。あなたはそれを短いと思った」
なぜ、こいつはそんなことまで知っている？　僕はそう思ったが、なぜか言葉が出なかった。喉の奥に何かがつまっているようだった。
「では、一年という浮気はどう思います？」
「一年？」
「ええ、一年です。どう思います？」
「長い……と思う」
「そうですか。ところで、あなたが優しい女性だと思っていた、美沙希は一年間浮気をされてましたよ？　それをどう思います？」と花城はにやりと笑った。
僕は唖然としていた。喉に引っ掛かっていたものはいつの間にか飲みこんでいた。
「男は鈍感です。馬鹿です。ああ、なんて勘が冴えないのでしょう」
「そして」と花城は右手の人差し指を立てた。「美沙希さんの浮気のことを磯台さんは知っていた」
「じゃあ」と僕が言葉を発しようとすると「何も言うな」と彼女が制した。
「磯台さんが美沙希さんを殺したのは、あなたが好きだったから。そして、浮気をしている美沙希さんはあなたに相応しくないと思ったから」
「そんな……」
「そんな事実が、ありました。……さて、私はこれで。警察に電話するなら電話してください。どうせ、あと少しなんです。私は最後の夜を楽しみます」と彼女は玄関へ向かった。彼女の歩いたあとに

は、靴底のあとが白くついた。
　僕は受話器を取った。彼女はドアを開けるところだった。
「あ、最後に」と彼女は顔をこちらに向けた。「冥土の土産をさしあげましょう。どうぞあの世に行くまで、楽しく、にこやかに、噛み締めてください。実は、磯台さん。あの旅行の時に、あなたに告白しようとしていたんです。気付いていましたか？」
「なんとなく、そう思っていた。言葉数も少なかったし、そういう気配もしていた」。僕は一を押した。
「あなたは勘が冴えない人ですね。どうしようもない人だ」と彼女は少し大きな声で言った。
「どういうことだ」と僕は視線を電話機に定めたまま、さらに一を押した。
「磯台さんは、睡眠薬を持っていました。しかし、あの吹雪の夜、それはテーブルの上にありました。飲まなかったんです。そして、あなたに告白するつもりだった。もっと詳しく言うなら、告白することがあったんです。これでも分かりませんか？」
「なんのことだ」。僕はそういって、〇を押した。
「私はあの夜、二人殺しました。これで鈍感なあなたにでも分かったでしょう。睡眠薬は体によくないですからね。では、さようなら」
　彼女はそう言って、部屋を出て行った。
受話器からは誰かが何かを言っている声が聞こえた。だが、僕にはそれが何なのか分からなかった。

エピローグ

【エピローグ】

女の姿で行動するのは好きじゃない。たとえ美少女であっても。男からの目線が気持ち悪いし、体が女じゃ女も抱けない。今回はハズレだった。あの人はなぜ俺をこの格好にしたのか。いっそのこと最初からパンダ姿の方がいいかもしれない。あと数時間で俺はこの世から消える。そして、また、あのつまらない世界へ逆戻りだ。

俺はポケットからタバコを出して火をつけた。

この季節パーカーだけじゃ寒いな。

「さて、最後の夜を楽しみますか」

俺はそう言って、明るい方へと歩き出した。

エピローグ（後書き）

読んでくださってありがとうございました。

この話は短編用にいずれ書きなおします。

もっと詳しく書かなければならないことがありそうなので。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8607q/

彼女を殺した人を知っている

2011年6月19日15時10分発行